

# 日蓮宗の宗論と問答

柴田章延

## はじめに

日蓮宗においては、宗論と問答は、その教団の濫觴期から教線拡張の主要手段として戦略的に行われていた。

ここでは、「宗論」とは、他教団との間で、僧侶（もしくは信徒）が勝敗を決することを目的に行うディベートのことを言い、「問答」とは、他教団との間、もしくは教団内の僧侶（信徒）が、互いに教学の理解を確認するために行う論議のことを言う、と理解しておきたい。もっとも、歴史的には「石城問答」「小樽問答」のように、勝敗を決することを目的としている場面でありながら「問答」という名前が用いられていることも多い。

本稿では、筆者が昨年調査した、福山市重顕寺蔵『諸宗問答口作集』をもとに、南北朝期における日蓮宗の布教戦略として用いられた宗論の実際を検証し、戦国時代、福岡市妙典寺において、日忠とキリシタンとの間に交わされた宗論である「石城問答」を検証することによって、中世から近世初頭における日蓮宗の宗論と問答の実際を概観する。さらに、これらの事例を元に、宗論と問答の現代的意味を考察しようとするものである。

## 一、『諸宗問答口作集』

広島県福山市水呑町重顕寺所蔵、『諸宗問答口作集』は、縦二十五、三 cm、横十五、二 cm、三十五紙六十九頁から

なる和綴本である。

昭和二年の日蓮宗宗宝調査の際に、簡単に調査されたようであるが、宗宝調査台帳は太平洋戦争時の空襲により焼失しているので、暫くその存在は忘れられていた。

『諸宗問答口作集』は、奥書（六十七〜六十八頁）に、

一 諸宗問答集一卷依實賢口入奉拝写者也

一 外二日像聖人御本尊一幅為改宗褒美

所被遣也

洛西乙訓郡鶏冠井村真言寺實賢者

本末為余師兄也像師命彼僧而示法

花之深義余信伏隨從而忽捨密宗

婦一乘因茲件之重宝奉感得者也

清光山重顕寺住僧

于時應長元大才辛亥仲陽良日 戒善院日行（花押）

とあり、応長元年（一一三一一）重顕寺住僧戒善院日行が、真言宗から法華（日蓮）宗へ改宗した際に、褒美として兄弟子である鶏冠井村真言寺實賢の導きにより書写したもので、この時日像上人筆曼荼羅も重顕寺寺宝となったとしているが、残念ながらこの奥書の一紙は後筆である。この頁だけが筆跡に相違が見られ、虫損のあとも違っている。

この場合、価値を高めるため年号をつり上げたこと云うことが当然疑われるわけであるが、まず書体が、正式な呼称

では勿論ないのだが、所謂「くりくり文字」と呼ばれる、鎌倉時代から室町時代初期によく見られるものである。また、暦応元年（一三三八）三月、浄土真宗の碩学存覚が、備後守護の役宅に於いて、法華宗徒と問答し、法華宗側が敗北したという記録がある。そして、この宗論の記録として存覚が執筆した『法華問答』のなかに、『諸宗問答口作集』に記される内容が頻繁に出てくる。

存覚と対論した法華宗徒が『諸宗問答口作集』を所持していたことは疑いが無く、その人物については、従来大覚妙実という説もあったが、『法華問答』の記述との符合から、重顕寺日行とみて間違いない。

これらのことから、『諸宗問答口作集』が書写された年代は、少なくとも暦応元年以前であると考えて差し支えない。奥書が後筆である理由は、或いは汚損により書き直したものかもしれないし、存覚との宗論に敗北した事実を隠滅したいが為であったかもしれない。

ともあれ、重顕寺蔵『諸宗問答口作集』は、永らく同寺に秘蔵されていたという現状を鑑みても、応長元年から暦応元年の間に、重顕寺日行によって書写されたものである。

つぎに、日行が書写した『諸宗問答口作集』の原本を著したのは誰か、という問題がある。

奥書では、鶏冠井村真言寺實賢が日行の兄弟子であり、その口入れにより『諸宗問答口作集』を書写することが出来たとされているが、原本の著者に関する記述はない。

鶏冠井村真言寺とは、現在の京都府向日市の鶏冠山南北真経寺のことである。實賢は徳治二年（一三〇七）もしくは延慶三年（一三二〇）、帝都開教に訪れていた日像と対論し、真言宗から法華（日蓮）宗に改宗。真言寺は西国最初の法華道場となった。實賢の師は日像であるから、實賢の口入れで書写したという事になれば、『諸宗問答口作集』原本の著者は日像の可能性が非常に高い。

『諸宗問答口作集』の構成は、序文に当たる部分（一～五頁）、「華嚴宗口作」（五～九頁）、「三論宗問答」（九～一

六頁)、「法相宗問答」(一六〇～二三頁)、「律宗問答」(二四〇～二五五頁)、「俱舍成実二宗問答」(二五〇～二七頁)、「浄土宗問答」(二八〇～三五五頁)、「真言宗問答」(三五〇～三八頁)、「禪宗口作」(三八〇～四二頁)、「天台宗問答」(四二〇～五九頁)となっており、この後には『無量義經』『梵網經』『大般涅槃經』『法華秀句』『守護国界章』等からの要文が抜粋されている。各宗派との間にどのような遣り取りが想定されるかを問答形式で記しているのだが、あまりにも台詞の一つ一つが生き生きと描写されており、「問答想定集」というよりは、日像が実際に経験した宗論の実録といった方が良い内容である。

『諸宗問答口作集』は、鎌倉時代から南北朝時代の、南都六宗および禅宗、真言宗、天台宗の各宗派と、日蓮宗がどのように宗論・問答を繰り返していったかがわかる大変貴重なテキストである。

紙面の都合上内容の詳しい紹介は別稿に譲らざるを得ない。本稿では日像による日蓮宗の主張の要旨のみかいつまんで紹介する。

### ○序に当たる部分

この部分は、宗論をする際の心得を訓じている。

はじめに「入門とは是口作なり」と書いてあるように、この一冊を以て、法華宗の宗義から他宗のおおよその教義に至るまでが理解できる構成となっており、入門書としての機能もあつたようだ。

宗論をする際には、かならず典拠となる教典を示しながら議論しなくてはならない、また人師の論釈をみだりに用いてはならない……といった内容である。

### ○華嚴宗口作

華嚴宗の僧侶との宗論を想定した章である。

日蓮宗の主張は「華嚴經の教えは無得道であり、その論拠として無量義經の『種々説法未顕真実』、また法華經方便品の『雖示種々道 其実為仏乘』の文を引き、華嚴は真実の教えではなく、法華經こそが唯一の真実である」とする。

そして、「問答」の時はただ方便真実の一段を用い、「宗論」の時には相手の宗派の祖師清涼国師澄観の謗法を責めるべきであるとしている。

### ○三論宗問答

三論宗の僧侶との宗論を想定した章である。

日蓮宗の主張は、「三論宗が依經としている般若部の經典は、法華經の前に説かれた經典であるから、真実の教えでは無く無得道である」とし、華嚴宗に対したときと同じように無量義經の「種々説法未顕真実」を引用する。

また、「嘉祥大師吉蔵の立てた三時教判は、法華經を不了義經としており、これは謗法の罪であるから阿鼻地獄に墮ちるだろう」と責めている。

### ○法相宗問答

法相宗の僧侶との宗論を想定した章である。

日蓮宗は、法相宗の所依の經典である解深密經は、未顕真実の經であり無得道であるとする。さらに「南都の謝表」（延暦二十一年、南都の碩学十四人が最澄の講筵に列し、桓武天皇に感謝状である謝表を奉った事件）を引き合に出し、すでに南都の教学は天台宗との間に勝劣の決着がついていると主張する。

### ○律宗問答

律宗との僧侶との宗論を想定した章である。

日蓮宗は、戒律には大小権実があり、法華經は「一乗具足戒」であるので、法華の妙戒に権經小戒は比べるべくも

無い、と主張する。

### ○俱舎成実二宗問答

俱舎宗と成実宗の僧侶との宗論を想定した章である。

日蓮宗は、無量義經の「種々説法以方便力四十余年未顕真実」を示し、初説四諦十二因縁・次説方等十二部經・摩訶般若波羅密・華嚴海空などは皆未顕真実であり、三乗の法は成仏の因にならないという。歴劫修行・終不得成無上菩提の教えである阿含の法をもって出離生死することが、未顕真実なのだ、とする。

### ○浄土宗問答

浄土宗の僧侶との宗論を想定した章である。

日蓮宗は、浄土教団の「千中無一」「捨閉閣抛」は謗法であり墮地獄であると主張する。そして觀無量壽經は法華經以前に説かれており、未顕真実であるとする。善導・法然は、衆生を誑かして自他共に無間地獄へ墮するという罪を犯している、と厳しい口調で批判する。

### ○真言宗問答

真言宗の僧侶との宗論を想定した章である。

日蓮宗は、空海の『秘蔵宝鑰』にある、法華經を無明・辺域・戲論とする主張は謗法にあたり亡国であると糾弾する。また真言宗の教義は「未顕真実」であることは疑いないという。

### ○禅宗口作

禅宗の僧侶との宗論を想定した章である。

日蓮宗は、禅宗を仏教の一宗とは認めないというスタンスを示し、教外別伝という考え方のものが天魔であるとする。また、首楞嚴經は未顕真実であるとする。

## ○天台宗問答

天台宗の僧侶との宗論を想定した章である。

日蓮教学は天台教学をベースにして成立していることは言うまでも無いが、成立して間もない日蓮宗にとって、日本天台宗との差別化を図ることは重要な教団運営上のテーマであった。

同じ法華経を依経とする日本天台宗に対して、日蓮宗はまず「未顕真実」の意味を厳密に規定することから主張する。「未顕真実」とは、声聞・縁覚の二乗に対してのみ有効な語であると主張する天台僧侶に対して、日蓮宗は法華経以前の菩薩の成仏は「終不得成無上菩提（無量義経十功德品）」であるとし、法華経以外に真実は無いという。浄土、真言、禅などの諸宗が乱立する現状は「権実俱迷」の時であると言い、他宗との共存関係にある日本天台宗を、折伏をしなければ謗法であると言いつ切る。

また、観心の行についても、坐禅などしている場合では無く、他宗を責めないでいるのは仏法の怨敵である、と主張している。

大変雑駁に内容を紹介したが、どの宗派に対しても日蓮宗が主張してきたことは「未顕真実」という経証による法華経の絶対的な優位性の主張と、その法華経以外の経典を要することは「謗法」となる、という論理であることがわかる。これらの主張は、安土宗論（一五七九〃天正七年）に至るまで、ほぼ形を変えずに続けられた。

しかし戦国時代から安土桃山時代にかけて、日蓮宗にとって変則的な宗論をせざるを得ない事態が起こった。キリシタンとの宗論である。彼らには「未顕真実」も「謗法」の理論も通用しなかったのである。

## 二、石城問答

キリシタンの日蓮宗観は、不干齋ハビアン（永禄八年・一五六五）元和七年・一六二二）がキリシタンの教学と仏教を対比して論じた『妙貞問答』によく現れている。

惣じて、あの日蓮宗と申すは、天台の内証にはかわり、万に私なる事のみ云いて、此の御経ならでは助からずと申す也。此は皆、仏法にても観道といいて、悟りに暗き故にて侍り。禅宗などは、かやうの衆をば無眼子とて、法の為にはめくらのやうに云えり。（『妙貞問答』）

と、日蓮宗には相当に悪感情を持っていたことがわかる。

日蓮宗とキリシタンが最初に宗論をしたのは、天文二〇年（一五五二）、山口においてトルレス神父が仏僧および仏教徒と論争した、とフェルナンデスが本国に宛てた書簡に記録されている（イエズス会日本書簡集）のがそれである。これは仏教とキリスト教の最初の論争でもあった（一五四九年に、ザビエルが薩摩で仏教徒と論争をしているが、これは公場で勝敗を決する宗論というものであったかどうかは疑問である）。

この山口宗論までキリシタン側は、神の概念を大日如来ととらえて布教する方針であったが、大日如来による救済を否定する日蓮宗僧侶の見解を聞き、「神」と「大日如来」は異なるものだと云うことに気づき、以後「デウス」とラテン語で呼称するようになった。

この時代のキリシタンの宗論では、当時の日本人が知らない科学知識である天文学（地球は球体である……等）や、プリズムを使って太陽光を七色に分解するなどと云った実験を目の前で見せ、万物の創造主デウスの偉大さに結びつ

けて解説する、といった手法が用いられた。この戦法に仏教の僧侶たちは、難解な専門用語を駆使して反論を試みるものの、多くは閉口せざるを得ず（閉口は敗北を意味する）、自ら袈裟を脱ぎ差し出して、逆に宣教師からたしなめられるといった有様であったという。また日蓮宗僧侶との宗論も多数記録されており、敗北したものはキリシタンへと改宗していったとしている（フロイス『日本史』）。

さてこのような時代を経て、慶長八年（一六〇三）に、明らかに日蓮宗がキリシタンに勝った、という宗論が記録されている。現在の福岡市博多区にある妙典寺で行われた「石城問答」である。

京都妙覚寺の僧、唯心院日忠が妙典寺で説法会を開いているとき、イルマン舊澤（旧沢）、イルマン安都を筆頭に武装したキリシタン集団が堂内に侵入し、日忠を取り囲むという事件が発生した。妙典寺の檀徒であった黒田長政の家臣鳥井吉重も、この急を聞いて手勢と共に鎮圧のため到着。吉重の提案で宗論により決着をつけることとなった。

まず、舊澤は「妙法五字の中、妙の一字は善悪不二・邪正一如・権実一体をあらわす。なぜ妙の義に違背して邪正を分け、キリシタンを邪教とのか」と問う。

これに対して日忠は、宝玉の中には水火が同時に存在するが、水が玉から出でれば玉を助け、火が出でれば玉を損なうという例を挙げ、「善悪一体であっても差別はあり、善は身を助けるが悪は身を滅ぼす」と説く。

ここで安都が「日忠の声は大きすぎる、小さな声で返答せよ」と注文をつける。

日忠は「経には出大音聲という。門戸を開いて外にいる聴衆にも聞こえるように云っているのだ。汝は慳貪の人である」と笑う。安都はこれに閉口してしまふ。

この後、舊澤は、○釈尊の心法と凡夫のそれとは格別であるか一体であるか、○「草木国土 悉皆成仏」というがそれならば修行せずとも成仏しているでは無いか、○一切衆生の心法は有始無終か無始無終か、と立て続けに問うがことごとく日忠に論駁されてしまふ。

そして舊澤は最後の問いを發する。

「三世の心法は一躰か、別躰か」

これはキリシタンが問答の時に使う常套句である。輪廻転生の概念を否定するときに用いるのだが、もし生まれ変わると云うことがあるのならば、いくらかでも前世の記憶が残っていてもよいでは無いか、誰もそんな記憶は持ち合わせていないのだから仏教の云う輪廻などは世迷い言である……という論法である。

これに対して日忠は、「汝の二歳の時の心法と現在の心法は一躰か。また寝ているときの心法と起きているときの心法は一躰か。もし別躰ならば、寝ているときは頭を切り離しているのか」と尋ね、舊澤が「一躰也」と答えると、過去世・未来世を知らないからと云って三世が別躰というわけではなく、法華を証得して一念開けたときに明らかに三世が見渡せるのだ……と説く。

これに舊澤は反論できず、キリシタン達はうなだれて妙典寺を去った、という。

石城問答が行われたのは豊臣秀吉によるバテレン追放令（天正一五年 一五八七）から一六年後のことである。舊澤にせよ安都にせよ日本人のイルマンである。宣教師が相手であればまたちがった展開になったかもしれない。

ともあれ、日蓮宗が宗論において「未顕真実」も「謗法」の論理も使わずに勝利した唯一の記録である。

この後、慶長法難（慶長一三年 一六〇八）で浄土宗に破れるという事件があるものの、江戸幕府により寺壇制度が整備され、教団が運営的に安定してくると、宗論による積極的な布教はほぼ役割を終える。さらに延享二年（一七四五）、富永仲基（正徳五年 一七一五）延享三年（一七四六）による『出定後語』が世に出ると、大乘非仏説が人口に膾炙されるところとなり、「未顕真実」も「謗法」も説得力を持たなくなってしまった。

幕末には優陀那院日輝が一向宗の僧侶と親交を深めるなど、摂受開会の教学を模索している。

### 三、おとめ

明治時代になり、近代仏教学は大乗非仏説を学術的に証明した。日蓮宗は宗論のための理論的根拠をほとんど失ってしまつた。

この時代から戦前にかけて日蓮宗は、武運長久の祈祷が盛んであつたという性格上からか、石原完爾などの軍人と深い関係を持つに至り、教学もまた、国体主義的性格（皇道仏教）を取り入れていく。また一部の僧侶、及び熱狂的な信仰を持つ社会思想家、日蓮系の新興教団は、テロリズムや国家諫行を強行することをそれぞれの目的としていく。血盟団事件、北一輝の影響下にあつた二・二六事件、日蓮会殉教青年党の「死なう団事件」などである。

戦前は国体主義の色彩の濃かつた日蓮宗であるが、戦後は世界平和・立正平和といったスローガンを打ち出すようになる。

そうした中で、もう一度宗論が復活する。創価学会との「小樽問答」（昭和三〇年）である。

この事件の顛末は正確な記録が残されており、大変有名な事件でもあるのであえてここでは触れない。この事件後、日蓮宗は宗論を全面的に禁止する。

日蓮宗にとって「宗論」とはなんだつたのか。

中世から近世初頭においては「宗論」は宗是であつた。日蓮宗の僧侶になると云うことは「宗論」のテクニックを学ぶと云うことであつた。これがなければ、宗門は歴史の中に埋没していたかもしれない。しかし正確な記録など採りようがない（宗論の記録はほとんどの場合勝者もしくは勝者を自認する側しか残さない。また中世の史料自体、現存するものが少ない）のだが、勝率は決して高いものではない。

これに対し、深草元政等、宗論を用いず学徳により効果的な布教に成功した例もある。また綱脇龍妙上人のハンセン氏病患者救済活動など、社会活動において高德を慕われる僧侶も数多く存在する。

今の日蓮宗にとってどちらが必要とされているかは云うまでもない。

しかし、様々なトラブルから、新興宗教教団との間で宗論にまで発展することは、可能性としてはあり得る。これもまた、リスクは大きく、得るものは少ない。

一般的に、日蓮主義者とナシヨナリズムは親和性が高いと認識されているが、宗門は恒久平和を希求する教団として明確な一線を引いているのであるから、世間の安易な誤解を正していかなければならない。

その際に、日蓮系の新興教団との教学上の差別化は、明確にしておかなければならない。彼らの特徴は、近代仏教学が解明してきた大乘仏典の成立年次という成果を、全く認めていないことである。

日蓮宗は「大乘非仏」であっても成立する堅牢なロジックを持つ日蓮教学を、長い時間をかけて慎重に構築していかなければならない。